

(5) ツル類の病害生物

・細菌類 (サルモネラ)

平成13年度の11月から2月にかけて、毎月2日ずつそれぞれ約50検体のツル類の糞便を採取し行った検査では、04群 (*Salmonella typhimurium*) が主に検出されている。特に年明け以降の検出割合が多い。本来ネズミ由来の菌と考えられ、給餌される餌とネズミの接触による汚染の可能性が指摘されている。また、耐性株の有無により、スズメ由来株、ブロイラー由来株との相互伝搬は起きていないことが確認された。(鹿児島県 2002)

なお、人工ねぐらで採水された水からも同じ型の菌が検出されている。

・ウイルス (鳥インフルエンザウイルス)

赤血球凝集 (HA) 活性を持つウイルスが1検体検出され、A/Crane/Izumi/96 (H6N1 orN2) とされた例がある。(鹿児島県 1997)

平成22年には、高病原性鳥インフルエンザ (H5N1) が発生し、ナベヅル7羽が死亡したが、糞便調査ではウイルスは検出されなかった。

・コクシジウム原虫

ツル類の越冬期である11月から2月にかけて、毎月2回ずつ採取した糞便による検査から、平均陽性率は84%で、渡来初期の11月、12月に陽性率が高く、1月、2月に減少するという傾向が見られている。(図5)

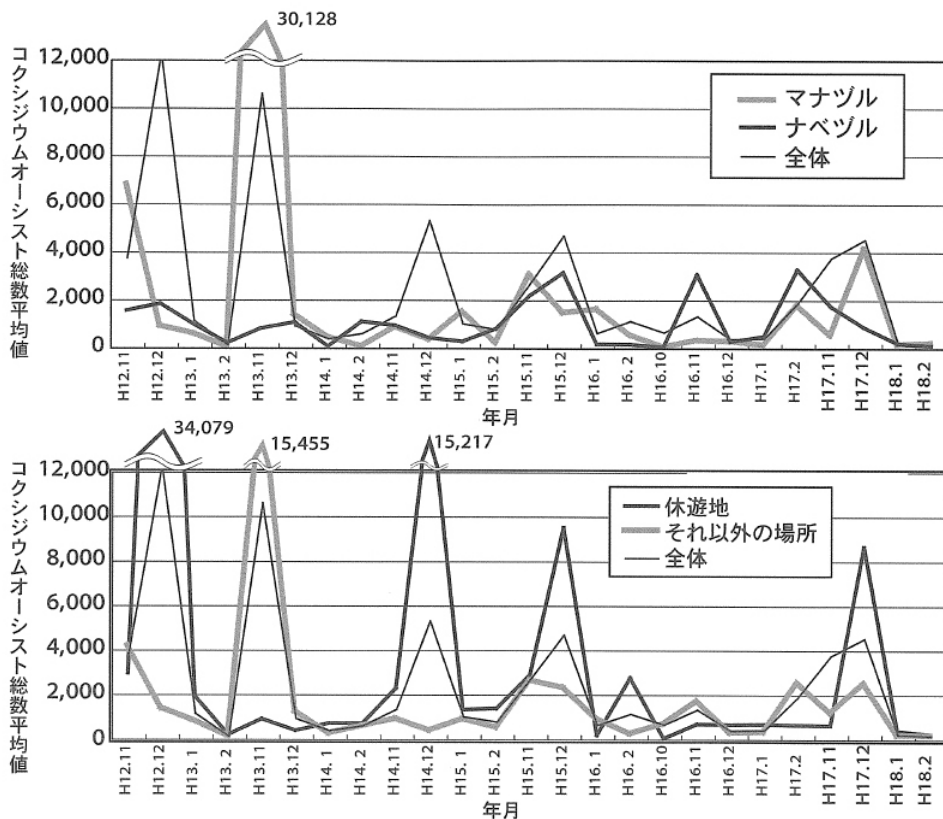


図5 平成12年度から平成17年度のコクシジウムOPG (糞1gあたりのオーシスト数)の変動 (鹿児島県教育委員会 2006)

※両グラフで「全体」とはマナヅル、ナベヅルの平均値にさらに混合検体の平均値を加えて平均値を求めたもの